NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ-200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　2

芳流 (kaoru)

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15240760

ダイの大冒険, アバン, ヒュンケル, レイラ, ロカ, マァム, 子ヒュン, 子マァム, 勇者アバンと獄炎の魔王

アバンが心に抱く疑問と、一向にアバンに懐かない少年ヒュンケル。
なお、日本語で言いますと、表音文字とは、ひらがな、カタカナで、表意文字とは、漢字のことです。

Table of Contents

あるべき未来に進むために　2

第２章　逡巡

　ロカは、カールの王都で新しく借りた自宅のリビングでため息を吐いた。
　すると、それに気づいた妻のレイラが苦笑した。
　ロカが難しい顔をしている原因がわかっていたからだ。
「大丈夫よ。アバン様のことだから、考えあってのことでしょう。」
「・・・いや、こういう時のあいつは信用ならねえ。あいつはいつも俺の予想の斜め上を行く。」
　ロカは、アバンの親友であり、誰よりもアバンのことを信頼していた。実際に、魔王ハドラーを倒そうと決意したアバンの冒険において、最初から彼とともにあったロカは、アバンの判断力や決断力、実行力を誰よりもよく知っていた。
　だが、その分、アバンのことをほかの誰よりも、油断がならない奴だと思っているのもまたロカだった。
　ロカはぶつぶつと文句を言った。
「だいたい、あの坊主を地底魔城で拾ったっていうのだって、俺は、カールに戻るまでのことだと思っていたんだよ。カールに着いたら、孤児院に入れて、ちゃんと手続きして。アバンが責任を負うのはそこまでだろう。いくら、あの坊主の親父に頼まれたからって。」
「ロカ。あの子のお父さんの話は口にしないようにって、言われてたでしょ。」
「わかってるよ。でも、もう、今日は遅いし、さすがに今晩は、アバンもあの坊主もこっちの家、来ないだろ。レイラしか聞いてないんだから、文句くらい言わせてくれよ。」
　レイラは、仕方がないという顔で、軽く息を吐いた。
「アバン様は、アバン様のお考えがあるんでしょう。」
「そりゃそうだけど・・・あいつの考えってのは、常に他人本位な

んだ。自分のためっていうんじゃない。誰かのために行動しちまうのが勇者アバンの美点であり・・・最大の欠点だ。」
　ロカは難しい顔をしていた。
　親友としてみれば、偉業を成し遂げたアバンには、それに見合うだけの報酬を受けてほしかった。命を懸けて戦って、世界の脅威を排したのだ。それくらい望んでもいいではないか。
　現に今、カール王室との話が続いている。その矢先に、地底魔城で拾った得体のしれない子供を抱え込んで、アバンに何の利益があるのか。ロカには、ヒュンケルがアバンの支障になるとしか思えなかった。
「大丈夫よ。きっと。それだけほかの人の幸せをお考えのアバン様ですもの。きっと、神のお導きがあるわ。ねぇ、マァム。」
　レイラは腕の中のマァムを抱き上げながら、そう言って微笑んだ。マァムは、母の微笑みに安心したように、小さな声をあげて笑った。

　ヒュンケルが朝起きて、２階の自分の部屋からダイニングに降りていくと、そこにいたのは、アバンではなく、レイラだった。
「おはよう、ヒュンケル。」
　レイラは、いつものように、マァムを腕に抱いて微笑んだ。
「・・・おはようございます。」
　ヒュンケルは、ぶっきらぼうにあいさつしたが、レイラは気にも留めていない様子だった。
　ヒュンケルは、あたりを見回すと、レイラに尋ねた。
「先生は・・・。」
「お城に行ったわ。王様に呼ばれてね。」
　レイラは、腕に抱いたマァムをヒュンケルに抱きかかえさせた。はじめのころはおっかなびっくりマァムを抱いていたヒュンケルであったが、このところはようやく慣れてきたようで、しっかりと、赤子の体を抱きとめていた。
「朝ごはん、用意するわね。マァム預かっててね。」
　アバンは、帰国してすぐに、カール王都にこの家を借りた。
　もともと彼はジニュアール家の屋敷を所有しているが、王都から

は遠く、不便であったため、とりあえずの仮住まいとして、同じ敷地内に２軒の家が立ち並ぶこの家を借り、一方をロカ一家が、一方を、アバンとヒュンケルが使用していた。
　しかし、ロカやアバンは王城に呼ばれることが多く、対してまだ娘が乳飲み子のレイラは家に残っていることが多かったので、必然的に、レイラがアバンたちの家にやってきて、ヒュンケルの世話を焼くことが多かった。
　アバンと魔王討伐の旅をともにした大魔導士マトリフは、カール国王に請われて、カール王国の食客として城内の一室を与えられており、拳聖ブロキーナは、都会の喧騒を嫌い、故郷のロモスに戻っていた。
　アバンがカールに戻って、早くも１か月が経っていた。
　ヒュンケルがダイニングの椅子に座って朝食を待っていると、腕の中のマァムが暴れだした。ヒュンケルは慌てた。暴れられると、落としそうになる。
「おい、ちょっとおとなしくしてくれ、マァム。」
　その様子をキッチンから見ていたレイラが声をかけた。
「ヒュンケル、お庭に出ていて。芝生の上にマァムを置いてあげて。朝ごはんは、そっちに持っていくわ。」
　ヒュンケルは、マァムを抱きなおすと、勝手口から外に出た。
　２軒の家の間には、小さな庭があり、芝生がきれいに生えていた。
　その柔らかな草の上に、ヒュンケルは、小さなマァムを置いた。マァムは、もうすぐ１歳の誕生日を迎えるとレイラが言っていたが、まだ歩けなかった。
　マァムは、ころんと寝返りを打つと、うつぶせの姿勢で頭を上げ、芝生の上に座ったヒュンケルの膝にすり寄ってきた。
「・・・お前、俺から離れたかったんじゃないのか？」
　さっき腕の中に抱いていたときには暴れたくせに。
　ヒュンケルは、ため息交じりに、マァムの頬を指でつついた。
　こんなにすべすべしていて、柔らかいものがあったのかと驚くような感触だった。初めて触れた時は驚いたものだ。
「・・・お前は、俺が怖くないんだよな・・・。」

ヒュンケルは、小さいマァムに目を落としながらつぶやいた。
　ふと、頭上を見上げると、一面に青空が広がっていた。雲一つない、いい天気だ。
　ヒュンケルは地下に作られた地底魔城で育った。
　地底魔城にあっても、闘技場や閲兵広場など、空が見える空間はあり、ときどき、父に連れられてそのような場に行ったときに、空を見上げたことはあった。
　だから、空が青いことは知っていたし、夜には一面に星が広がることも知っていた。
　だが、ヒュンケルは、アバンとともにカールで暮らすようになって、空を見上げるたびに思う。
　この地上は、自分の生きる場ではない、と。
　ふと、膝に重みを感じた。
　見ると、マァムがヒュンケルの膝に両手をついて乗ろうとしている。
　ちょうど、つかまり立ちの時期だったから、手近なものには何でも捕まる時期なのだ。レイラからそう聞いていたのに。
　何故か、マァムの手が、ヒュンケルをこの地上にとどめようとしているように感じられた。

　アバンは城での業務が終わった後、すぐには自宅に戻らず、隣のロカの家に寄っていた。
　レイラとマァムは、まだアバンの家でヒュンケルと一緒にいる。
　ロカは、自宅のリビングでアバンにコーヒーの入ったカップを差し出すと、自分もアバンの向かいの椅子に座った。
　ロカはアバンに尋ねた。
「陛下のお話、お前、どうするつもりなんだ。」
　ロカの声は、どことなく、不満そうな色を帯びていることに、アバンは気づいていたが、アバンはあえて中途半端な返事をした。
「・・・どうしようかと思っていましてね・・・。いいお話だとは思うんですが。」
「いい、どころじゃないだろう。この上ない話のはずだ。」
　ロカが畳みかけると、アバンは困ったような笑みを浮かべた。

「・・・やっぱり、ロカもそう思いますよねえ・・・。」
「当たり前だろう。お前、何を迷ってんだよ。陛下がお前の理想に共感して、そのために莫大な資金を提供してくださるっていうんだぞ。」
　ロカの言葉に、アバンは深くうなずいた。
「そうなんです。いいお話なんです。
今回の魔王ハドラーの脅威は去りましたが、いつまた同様の危機が起きるかわからない。その時に備えて、魔王やそれに近い脅威と戦える勇者や戦士、魔法使いを養成する必要がある、という私の話に、国王陛下はいたく共感してくださいましたものね。」
　ロカは、アバンがカール国王の前で語った内容を思い出し、それに対する国王の回答を脳裏に蘇らせながら言葉を紡いだ。
「そうだ。そのための施設の設立、運営、その基盤として必要な資金を運営する財団の設立、これをカールの国庫から出してくださるっていうんだぞ。」
　ロカの言葉をアバンが継いだ。
「それも、カール王国と独立した財団としてね。」
　アバンはいったん言葉を区切って、何かを考えているような顔をしていたが、やがて、口を開いた。
「確かに陛下のおっしゃる通りなんですよ。
カールから独立財団にして、そこの運営として、養成施設を作れば、世界中から人材が集まります。それに、何か危機的状況が生じたときに、各国の思惑に左右されずに戦力を派遣できます。
いいお話過ぎて困っちゃうくらいですよ。」
「何も勇者を育てるには旅の中じゃなきゃいけないってわけじゃないだろ。」
「それはそうなんですよね・・・。」
　ロカは、アバンが何に引っかかっているのか、はっきりとはつかんでいなかったが、思いつく原因は一つしかなかった。
「お前が気になっているのは、あの坊主のことか？」
　もちろん、地底魔城で拾ったヒュンケルのことだ。
　だが、アバンの回答ははっきりしない。
「それもありますが・・・。」

「なんだよ。」
　アバンは、やはり何かを考えているような表情のまま、ロカに語った。
「もしその施設ができるのであれば、ヒュンケルはそこで育てることもできます。彼には身寄りはありませんが、ジニュアール家の一員にしてしまえばいい。そうすれば、それなりの家柄も整います。同世代の子と交わったほうが、私たちみたいな大人とばかりいっしょにいるよりも、あの子にはいいとは思うんですよね。」
「だったら、何の問題もないだろ。」
　ロカの言葉に、アバンは、目を閉じて、しばらく考え込んでいた。いや、考えるというよりも、自分の考えを表す言葉を探しているような表情だった。
　アバンは、言葉を紡いだ。
「ただ、ロカ、私には、ずっと引っかかっていることがあったんです。」
「引っかかる？」
「ええ。
前々から違和感を持っていたんですが・・・ヒュンケルに会って、確信しました。」
　アバンはまっすぐにロカを見つめ、はっきりとした口調で語った。
「ロカ、私たちのこの世界は、いま、もしかしたら、本来の姿から歪んでしまっているのかもしれませんね。」
　ただ、その歪みが何なんか、なぜそう思うのかは、アバンは語らなかった。

　その日の夜、アバンは夕食後、自室でデスクに座ったまま、腕組みをして考え込んでいた。
　カール国王には、近いうちに返事をしなければならない。
　王は、財団の代表にアバンを据えると言っている。それを受けるかどうかだ。
　アバン自身がロカに語ったように、いい話には違いない。
　だが、どうしても、アバンには気になっていることがあった。

それは喉に刺さった小骨のように、アバンの中で違和感として存在し続けていた。
　このまま進んでいいものか。
　アバンは、脳裏に、幼い時に出会った魔族の男の姿を思い描いていた。
―先生・・・。どう思いますか？
　だが、あの男は、決してアバンに答えを教えることはなかった。たとえば、スライムがチーズを食べるか、などの些細なことでもだ。
―自分で考えろって言われて終わりですよね。
　アバンは苦笑した。
　目の前には、彼から受け継いだ唯一のもの、魔族の文字の辞書がある。
　ふと、アバンの部屋がノックされた。今この家にいるのは一人しかいない。
　アバンは、ドアの外に向かって声をかけた。
「どうぞ、ヒュンケル。」
　ドアが開き、その向こうに不機嫌そうな顔のヒュンケルが現れた。わざわざ彼の方から来るのは珍しい。
「どうかしましたか？」
　アバンの問いかけに、ヒュンケルは、言いにくそうにアバンに尋ねた。
「明日・・・ロカさんが、騎士団に俺を連れて行くって言うんですが・・・。」
「ああ、言ってましたね。」
　こともなげにアバンが言うと、ヒュンケルはためらいがちに尋ねた。
「・・・いいんですか？」
　アバンは逆にヒュンケルに尋ね返した。
「どうしてそう思うんです？」
　ヒュンケルは、しばらく口をつぐんでいたが、やがて、重い口を開いた。そこから零れ落ちたのは、幼い子供が使うには、あまりにも悲しい言葉だった。

「・・・俺は、普通じゃないんでしょう？」
　彼は、地底魔城という魔王の城で、アンデッドモンスターを父として育っている。だが、ヒュンケル自身の種族は人間だ。彼の育ち方が、通常の人間の育ち方とは大きく異なっているということが、ここ１か月のカールでの暮らしで、彼にも薄々わかってきたのだろう。
　ヒュンケルの言葉が何を指しているのか、アバンはすぐに気づいたが、あえて彼は尋ね返した。ヒュンケルの育ちについて、アバン自身が異常とは思っていなかったからだ。
「普通じゃない、とは？」
　だが、アバンの問いにヒュンケルは答えなかった。
　彼は下を向いたまま黙っていた。
　しばらくして、ヒュンケルは違う内容を口にした。
「・・・俺は、人間の騎士団なんかに興味ありません。行ったって・・・。」
　その言葉をアバンが遮った。
「あなたは、一流の戦士になりたいんでしょう？
カールの騎士団は世界屈指で、ロカはその騎士団長です。彼らがどんな訓練をしているのか、どんな技を持っているのか、見るだけでも違いますよ。いい機会じゃないですかね。なかなかないですよ。騎士団長自らの解説付きなんてね。」
　アバンは、椅子に座ったまま、ヒュンケルに目線を合わせて言葉をつづけた。
「ヒュンケル、あなたは今まで多くの人と接していなかったから、戸惑うのは理解できます。でも、少しずつでいい。今までやっていなかったことに挑戦してみませんか？何でも自分で経験してみないとわかりませんよ。」
　アバンは言いながら、かつて自分も同じことを言われたなと思い、そう指導してくれた「先生」と彼の周りの大人たちに密かに感謝した。
「・・・はい。」
　ヒュンケルは、アバンの言葉に、今度はうなずいたが、やはりその声には迷いがあった。

ヒュンケルは、落ち着かなく視線をさまよわせていたが、やがて、アバンのデスクに置かれた１冊の本に気づいた。それに目を引かれた。
　見覚えのある、懐かしい文字が書かれていた。
「先生。それ、辞書、ですか？」
　ヒュンケルの言葉に、アバンが驚いた。これは、魔族の文字の辞書。当然、表紙の文字も、魔族の文字だ。
「読めるのですか？」
「ええ。λεξικό（レキシコー）って・・・。」
　ヒュンケルは、正しく、発音し、その意味も分かっているようだった。
　いまは、地上の人間も魔族も、話し言葉はほぼ同じだが、使用する文字は異なっていた。
　地上の人間は、現在は表意文字と表音文字を混合させて使用しているが、魔族が使う文字は表音文字のみで、地上の文字と比較して、単純化されていた。それは、もともと等しく地上で生活していたはずの魔族と人間が、長い歴史の中で魔界と地上に分かれことに起因するのだろう。魔界には、人工の太陽しかなく、よって、地上よりも暗いゆえに、文字も単純化されたのではないかと推測されていた。
　古語についても、人間と魔族で大幅に異なるところはなかったが、そもそも古語を解する現代人はさほど多くはない。
　ただ、辞書を表す言葉としては、魔族の間では、この古語が使われることがたびたびあったようであった。わかりやすく言えば、少し気取った言い方、となるだろうか。ヒュンケルは、その言葉を理解していた。
　アバンは思案した。
「ヒュンケル、あなた、私があげた絵本も読んでいましたよね。」
「・・・ええ・・・。」
　もちろん、現代の地上の文字で書かれたものだ。
　難しい文字が入っていない平易な絵本だったが、ヒュンケルは難なくそれを読んで、マァムに読み聞かせていた。
　アバンはヒュンケルに尋ねた。

「この辞書に近いものも、見たことがあったんですか？」
「・・・はい・・・。」
　アバンは、ヒュンケルの回答を聞き、考え込んだ。
　初めて食卓を囲んだ時のように、彼の言葉の端々から、彼の生きてきた境遇を探ろうとした。
　そして、彼の言葉が指す意味にアバンは思い当たり、その面に笑みを上らせた。
　アバンは、ヒュンケルに魔族の辞書を見せながら語った。
「これは、私が子供のころ、私が『先生』と呼んでいた人からいただいたものです。大事なものなんですよ。あなたがもし、これを使う時が来たら、貸してあげますよ。」
　アバンは、ヒュンケルに向かって穏やかに微笑んだ。

　その夜、アバンは小さな物音で目を覚ました。
　隣の部屋から聞こえてくるその音に気が付き、アバンはベッドからすべり下りた。
　隣は、ヒュンケルの眠る部屋だった。
　既に時刻は夜半であり、子供が起きているような時間ではない。
　アバンは、そっと、彼の部屋のドアを開けた。
　思った通り、室内に明かりはなく、ランプは消えたままになっていた。
　ヒュンケルはベッドで眠っていたが、アバンが近づいてみると、ヒュンケルが小さなうめき声をあげているのに気付いた。
　よく見ると、目じりからは涙があふれていた。
　アバンは、ヒュンケルの声に耳を傾けた。
「・・・父さん・・・父さん・・・行かないで・・・。」
　弱弱しい、小さな呼び声だった。
　アバンは、胸が苦しくなった。
　この子をこんなに苦しませているのは自分なのだ。
　アバンは、そっとヒュンケルの右手を握った。すると、思いのほか、強い力で握り返された。
「父さん・・・。」
　さっきよりも幾分か安心した声色で、ヒュンケルは父を呼んでい

た。
　ヒュンケルは、眠る前に、アバンの部屋で、久しぶりに魔族の文字を見たことで、地底魔城での思い出が強く蘇ってきたのだろう。それは、必然的に、彼が父の遺体を目にした時の記憶をも呼び覚ましたに違いなかった。
　アバンには何もできることはなく、ただ、ヒュンケルの右手を握った。少しでも安らぐようにと。
　アバンが手を握っていると、うめき声を上げていたヒュンケルの寝顔が、少しずつ、穏やかになっていった。
　そして、しばらくすると、ようやく規則的な寝息を立て始めた。
　アバンは、安心し、ヒュンケルの寝顔を見ているうちに自分も眠くなった。
　そして、アバンは、自室に帰るのが面倒になり、そのままヒュンケルのベッドにもぐりこみ、彼の横で眠りについた。

　翌朝、アバンよりも早く目を覚ましたヒュンケルは、隣で、しかも、自分の手を握って眠るアバンの姿を目にし、顔を真っ赤にして逆上した。
　そして、彼は、眠っているアバンをそのままベッドから蹴り落したのだった。